

# 教員・職員・研究者協働による AL 型授業改善に関する実践的研究 —「山口と世界」での実践事例を通して—

林 透

## 要旨

筆者が担当するアクティブラーニング（AL）型授業「山口と世界」では、2015～2017年度の3年間にわたり、研究者によるアクションリサーチを受けた授業改善を行ってきた。研究者による授業実施前後を中心としたアクションリサーチでは、シラバスに記載された到達目標に照らした授業成果物の検証、フォトボイス調査手法を活用した受講生の授業受講期間中の学修行動の把握とインタビュー聴取を通じた360度型の授業観察の徹底により、毎年度の授業改善点を抽出し、翌年度の授業改善に活かした。この授業改善プロセスの過程において、図書系職員との協働による情報探索関係の授業コマ導入や地域情報パスファインダー開発、課題探究成果や授業外学修の向上が図られた。

AL型授業設計では、探究課題の設定のあり方、講義とグループ活動との時間的配分や教員の関わり方、さらには、教室内学修と教室外学修の有機的関係性が大事である一方、各担当教員の課題となっていると言えよう。今回の実践的研究を通して、AL型授業設計で抽出された課題を提示しながら、当該課題の改善方策とその後の変容を明らかにすることで、AL型授業設計の一つの指針となることを目指している。また、教員と職員が連携したAL型授業運営のモデルとしての意味付けを行いたい。

以上のように、本稿では、教員・職員・研究者協働の実際を辿り、AL型授業改善のプロセスと結果を考察する。

## キーワード

アクティブラーニング（AL）型授業、アクションリサーチ、情報探索スキル

## 1 はじめに

### 1.1 山口大学における AL 型授業の代名詞としての「山口と世界」

AL型授業「山口と世界」は、2013年度の共通教育改革により開設された課題探究型科目であり、全学部必修の初年次科目となっている。原則として1年次後期の受講科目で、30教科目が配置され、授業担当は国際総合科学部及び大学教育機構の専任教員が担当している。授業の一般目標は「地域社会の理解」と「国際的視野の涵養」に統一されているが、個々の授業の到達目標やテーマはそれぞれの担当教員の裁量に委ねられている。

各担当教員によって「山口と世界」の到達目標が乖離し過ぎることがないように、2013～2014年度にかけて、学修評価の規準を明確化したコモンルーブリックを授業担当教員同士で作成し、情報共有している。このようなコモンルーブリックを組織的に開発・運用している事例は、当時としては、全国に先駆けたものであった。

以上のように、「山口と世界」は全学AL推進の司令塔的科目に位置づけられるとともに、その学修評価のためのコモンルーブリック開発に寄与しており、山口大学が2014年度に採択を受けた文部科学省・大学教育再生

加速プログラム（AP）においても重要な役割を果たしている。

## 1.2 AL 型授業「山口と世界」の諸課題

山口大学では、既述のとおり、2013 年度に共通教育改革を行い、全学部（共同獣医学部及び国際総合科学部を除く）の学生が同じ学習の目的に向けた 30 単位を必修科目として履修する体制とした。新しい共通教育の実態を把握するため、2014 年度に「新しい共通教育に関するアンケート調査（教員用・学生用）」を実施したのに続き、「新しい共通教育」の導入から 4 年経った 2016 年度には「新しい共通教育」で学んだ学生が初めて卒業する時期を迎えるに当たり、「新しい共通教育の検証に関するアンケート調査（教員用・学生用）」を行い、両アンケート調査結果の比較を行った<sup>1)</sup>。

学生用アンケートでは、「山口と世界」の受講生の満足度に関する設問を設けた。2014 年度調査と 2016 年度調査を比較すると、図 1 のとおり、「非常に有意義である」「有意義である」と感じる学生が増える一方、有意義でないと感じる学生を十分に解消できない状況を抱えていることが判明した。

一方、教員側の声として、「この『よくわからない授業科目』、『他者と関わるのが苦手な学生』、『サボろうとするお調子者の学生』、まずはこれらの問題を極力小さくしたいと考えました。それには、初回の授業が重要であり、初回が上手くいけば、あとは学生

が自由に積極的に活動してくれることもわかってきました。」（AL ベストティーチャー教員）といったコメントがあるように、経験的にディシプリンベースの授業設計に慣れてきた教員の中には、一見、掴みどころのない科目との印象を抱く教員が一定数いる。

## 2 アクションリサーチによる課題抽出

一般社団法人・大学教育学会による課題研究「アクティブラーニングの効果検証」（2015～2017 年度、代表者：京都大学 溝上慎一教授（当時））において、AL 型授業における教室外学修の実態調査が計画され、筆者が担当する「山口と世界」を調査対象となり、自身も研究協力者として当該課題研究に関わることとなった。

筆者が担当する「山口と世界」では、「みんなで考える大学設置構想 in やまぐち」を探究課題として、複数の学部の 1 年生（一部、2 年生を含む）がグループでの調査、討論、まとめ、発表を行うことを重点に置いた AL 型授業を構成している。当該授業は 1 単位科目であり、計 8 回で構成され、授業前半回では、教科書 2 冊（吉見俊哉『大学とは何か』（岩波新書）、中嶋嶺雄『なぜ、国際教養大学で人材は育つのか』（祥伝社黄金文庫））による講義やレポート課題を中心とし、授業後半回では、グループワークによる大学設置構想の企画案・ポスター作成を中心としている（表 1 参照）。

今回の課題研究では、調査者（研究者）と

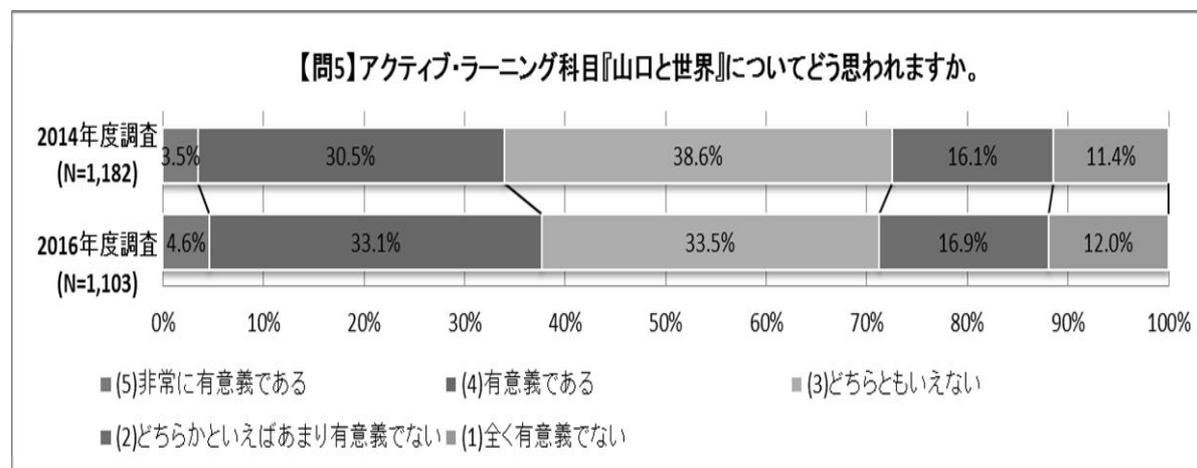


図 1 新しい共通教育に関する学生調査における経年変化（一部）

して三重大学 地域人材教育開発機構 長澤多代 准教授が担当し、図書館情報学の専門家の観点から教室外学修の実態をアクションリサーチすることとなった。具体的には、「Moodle を活用したフォトボイス調査<sup>2)</sup>を通して『山口と世界』受講生の授業外学修実態記録・把握（いつ、何を、どこで、だれと）」「教員による授業指示と学生の授業外学修の影響分析」「教員・図書系職員・研究者による三者協議」の三項目を中心とした進め方である。研究者によるアクションリサーチでは、フォトボイス調査という方法を通して、受講生が記録した授業外学修に関するデータに基づき、授業外学修の実態（場所・時間・媒体など）や、教員による授業指示と学生の授業外学修の因果関係などを分析することが目的であった。

その結果、研究者からのアプローチとして三点が提案された。一つ目は、シラバスの到達目標と従来の授業成果物の検証を行った結果、「情報を適切に収集し、的確に分析することができる」と明示された到達目標に関連する教員側からの関与やそれに伴う学生の学修行動に不十分さがあった。具体的には、最終成果物であるポスター内容の薄さや参考文献の欠如が指摘された。二つ目は、1 年次前期必修科目「情報リテラシー演習（現・データ科学と社会 I）」において図書系職員がガイダンスしているコマを「山口と世界」の授業に組み込み、実際の探究課題に関連付けた図書系職員による授業参画を検討した。さらに、三つ目は、学生による情報探索を強化するために、探究学修を行う授業回について図書館（ラーニングコモンズ等）で授業実施することを検討した。

また、図書系職員からのアプローチとして、研究者の提案に連動する形で、三点が提案された。一つ目は、授業成果物において、図書館情報が活用されていないとの指摘を受け、何らかの方策を協議することが提案された。二つ目は、「山口と世界」が開設された 2013 年度からあった図書館側の要望として、地域コーナーの情報活用の強化があり、当該授業の中で図書館ミニツアーを組み入れるこ

とが提案された。三つ目は、地域情報パスファインダーのリーフレット作成に着手し、「山口と世界」担当教員への周知のほか、図書館 Web サイト「テーマ別探し案内」への掲載を進めることとした。

さらに、教員からのアプローチとして、研究者や図書系職員の関与に伴い、授業の改善充実が図られる中で、情報探索スキルに関するルーブリックを作成し、受講生にとっての情報探索スキルの重要性や自己評価資料としての活用を提案した。

教員・職員・研究者からの上記の提案を踏まえながら、協議や改善に係る実践を重ねる中で、表 1 に示すとおり、授業計画を大幅に変更するに至った。2015～2017 年度にかけて取り組んだ授業改善の具体については、次章で順序立てて紹介したい。

表 1 改善前後の授業計画の比較

【改善前の授業計画（2015年度）】	【改善後の授業計画（2017年度）】
AL教室のみで実施、1グループ6～7人	①～③AL教室、④～⑧図書館で実施、1グループ4～5人
①チームビルド	①チームビルド、 <u>教科書レポート</u>
②・③レクチャー、教科書レポート	②・③レクチャー、教科書レポート
④レクチャー	④ <u>情報探索法レクチャー、図書館ツアー</u>
⑤レクチャー、教科書レポート	⑤ <u>グループワーク</u>
⑥・⑦グループワーク	⑥・⑦グループワーク
⑧ポスターツアー・発表・評価	⑧ポスターツアー・発表・評価

### 3 教員・職員・研究者協働による AL 型授業改善

2015 年度から始まった教員・職員・研究者協働による AL 型授業改善であるが、実際の授業改善の第一段階は、2015 年度の授業観察を経た 2016 年度からの授業実践となる。

まず、2016 年度においては、前年度のフォトボイス調査から、受講生が授業配布資料の情報だけに依存している状況を認識したため、図書館での情報探索を強化し、グループ企画書様式の変更を行った。具体的には、「大学設置都市の地誌等の記載項目」「参考文献の記載項目」を追加した。この結果は、

授業成果物である大学設置構想ポスターに反省され、図 2・3 に示すとおり、「大学設置都市の地誌等の記載項目」「参考文献の記載項目」が追加されたことで、根拠に基づく資料づくりが図られた。

また、クラスサイズの小規模化を図り、従来の 6・7 名規模から 4・5 名規模に変更し、学生各人の役割分担や責任性を強化した。



図 2 改善前の授業成果物（ポスター）

次に、2017 年度には、授業 8 回の構成要素を更に改善し、前半の講義中心の授業回において「教えずぎない」「与えずぎない」ことに注意した。また、情報探索の 1 コマの一層の有効化を図るため、教員・図書系職員・研究者での三者協議を通して、ワークシート様式の改善を図った（図 4・5 参照）。ワークシート様式の改善に伴い、情報探索の 1 コマでの学生の学修行動が主体的となり、ワークシートへの記載内容が増えるとともに、各種文献を調べる多様性が生まれた。このことは、学生グループで作成する企画書やポスターでの参考文献の記載の充実に繋がった。



図 4 改善前の情報探索ワークシート



図 3 改善後の授業成果物（ポスター）

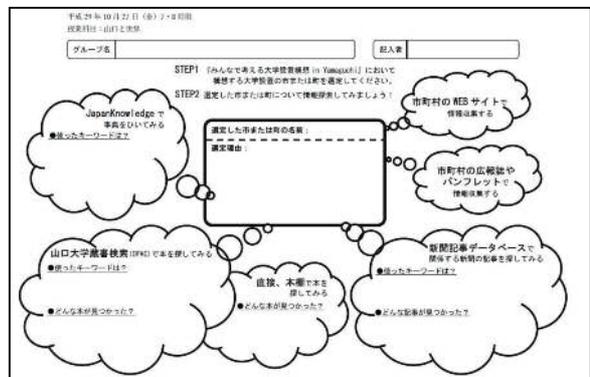


図 5 改善後の情報探索ワークシート

また、大学設置都市の選択においてゲーム感覚を盛り込み、グループによるドラフト会議形式の都市選択の仕組み（図 6 参照）を考案したほか、後半の企画書・ポスター作成などグループ活動が集中する過程において、中間発表の機会を設定した。この授業で扱っているテーマ自体について、受講生の中には専門分野や関心分野と異なると感じる者がい



図 6 図書館での授業風景（大学設置都市選択におけるドラフト会議の一コマ）

ることが否めないが、グループでの協調学修を通してテーマについて構想する・発表することを養うことに主眼を置いた授業であるため、多分野の学生と協調しながら学ぶ意欲を引き出すためゲーム感覚や他グループとの競争性を意識した授業設計は効果的である。

さらに、「山口と世界」の授業改善を通して、「情報探索スキル」の重要性を強く認識したことから、教員・職員・研究者の三者協議により、「情報探索（Investigation）スキルに関するルーブリック」（表 2 参照）を開発し、授業中に配布し、学生自身の現時点でのレベルを自己評価する機会を設けている。なお、この「情報探索スキルに関するルーブリック」は、授業科目「山口と世界」に限らず、初年次学生が身に付けておくべきスタディ・スキルのチェックリストとして汎用的活用を目指している。

表 2 情報探索（Investigation）スキルに関するルーブリック（Ver.1）

規準	観点	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
課題認識	●課題を認識し、その解決に必要な情報の範囲を定める。	自ら調査・研究テーマを設定し、仮説を立てることができる。	課題に沿ったテーマを設定できている。	課題の意図を正しく理解できている。	課題の意図を理解できていない。
情報探索の計画	●情報の適切・効率的な探索を計画する。	信頼性の高い情報を選択できている。	課題の解決に適した信頼性の高い情報源を推測することができる。	貸出・予約・レファレンスサービス等、文献入手に関する図書館サービスを利用できている。	貸出・予約・レファレンスサービス等、文献入手に関する図書館サービスについて理解していない。
情報の入手	●探索計画に基づき、課題解決に必要な情報を適切・効率的に入手する。	先行論文等の引用文献リストを利用し、計画的に探索できている。	情報ニーズに合う文献やメディアを効率的に選択できている。	図書館における資料や検索ツールをしながら、情報探索することができている。	図書館における資料や検索ツールをうまく利用できていない。
情報の分析・評価	●収集した情報を批判的に分析・評価し、情報を整理・管理する。	収集した文献情報を活用できるように組織化できている。	入手した情報の正確性・真正性と、調査テーマとの関連性を評価できている。	情報を取捨選択し、活用できるように整理することができている。	情報の取捨選択ができていない。
情報を批判的に検討し知識を再構造化	●整理した情報を批判的に検討することで自らの知識を再構造化する。	得た情報を一般的概念として構成し、新たに適用することで知識として再構成できている。	選択した情報を自分の文脈で意味付け、自分の言葉で説明できている。	入手した情報を比較・分類し、自らの考えとの類似点や相違点を説明できている。	入手した情報を客観的に捉えることができていない。

出典：『高等教育のための情報リテラシー基準 2015年度版』（国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会(2015.3)）掲載の活用体系表（例）をもとに作成。

#### 4 2015～2017 年度における授業変容と成果

これまで、研究者によるアクションリサーチを受けて、授業実践者である教員と図書系職員の具体的な改善内容について言及してきた。これらの授業改善の結果、どのような授業変容が見られ、成果が得られたのか、について考察したい。

大学教育学会・課題研究グループでは、AL 型授業を対象とした「授業プレ・ポスト調査アンケート」<sup>3)</sup>を設計していた。筆者が担当する「山口と世界」においても受講生を対象に、授業前半でのプレ調査アンケート及び授業最終回でのポスト調査アンケートを実施した。当該アンケート結果について、2016 年度から 2017 年度にかけての経年変化を確認したところ、大きな変容が見られた。

まずは、授業外学修時間が大幅に増えており、2016 年度 Q4 期の平均値が「92.7 分」であるのに対し、2017 年度 Q4 期の平均値が「144.5 分」となっている。詳細を見ると、「週 1 時間～2 時間以内」の層が相対的に減少し、「2 時間～3 時間以内」「3 時間越え」の層が相対的に増加している。「教えすぎない」「与えすぎない」という教育方針のもと、学生による主体的な学びが増加した証であると見なしたい。

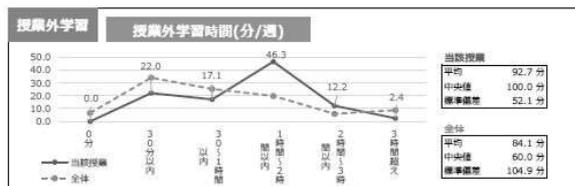


図 7 2016 年度クォーター4 期「山口と世界」受講生の授業外学習時間の分布

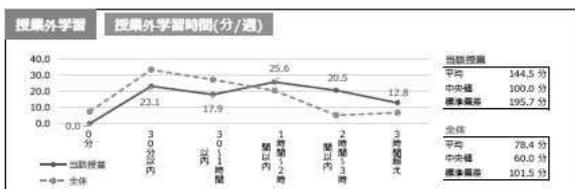


図 8 2017 年度クォーター4 期「山口と世界」受講生の授業外学習時間の分布

次に、授業プレ・ポストでの学生自身が感じるコンピテンシー（知識・技能）の修得度合について、全体的な広がりが見られる。特に、「⑤異文化の人々に関する知識」「⑩国民が直面する問題を理解する能力」「⑰コンピュータの操作能力」「⑲グローバルな問題の理解」といった項目において向上がみられることに注目しておきたい。授業で与えられた課題について、多様な分野の学生が協調しながら学修し、情報探索に基づく根拠のある提案を目指した授業であることから、このような学生のコンピテンシー（知識・技能）の変容は大きな成果である。

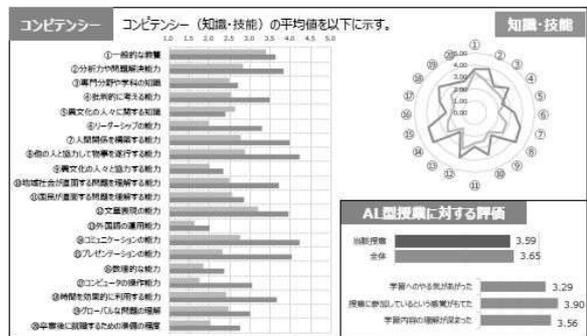


図 9 2016 年度クォーター4 期「山口と世界」受講生のコンピテンシー（知識・技能）の変容

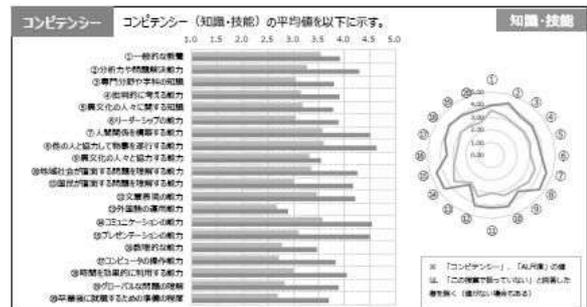


図 10 2017 年度クォーター4 期「山口と世界」受講生のコンピテンシー（知識・技能）の変容

さらに、学生の学修行動が変わった。本アンケート調査における学修行動の項目に基づきながら、「深い学習のアプローチ」「浅い

学習のアプローチ」の変容を明らかにしている。この結果によれば、2016年度Q4期に比べ、2017年度Q4期における「深い学習のアプローチ」の上昇とともに、「浅い学習のアプローチ」の低下が顕著である。この結果は、2015～2017年度にかけて教員・職員・研究者協働による授業方法の改善充実の成果である。特に、情報探索に力を置きながら、受講生に深い学びを促したことが大きな理由だと思われる。

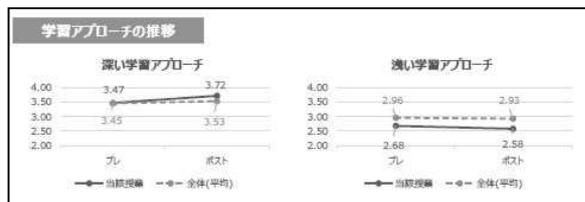


図11 2016年度クォーター4期「山口と世界」における学習アプローチの推移

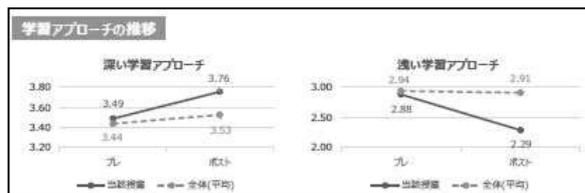


図12 2017年度クォーター4期「山口と世界」における学習アプローチの推移

最後に、大学教育学会・課題研究において調査した事項として、参考文献内訳の分析がある。図13は2016年度Q3期(8グループ)と2017年度Q4期(9グループ)の比較データではあるが、参考文献についてホームページに偏っていた傾向から図書・雑誌、新聞を参照する傾向が見られる。これは、情報探索ワークシート様式を変更し、学生に情報探索に興味関心を持ってもらうようにしたことや、それと連動した図書館見学ツアーの強化などによる成果である。この成果は、授業成果物であるポスターの充実に繋がるものである。

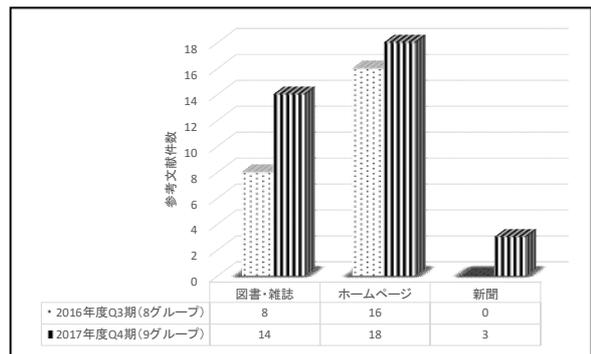


図13 参考文献内訳の推移

以上のような授業変容を象徴するかのようには、授業成果物であるポスターの記載形式だけでなく、質的充実が伴った作品(図14参照)が生まれつつある。



図14 2017年度授業成果物(ポスター)の一例

## 5 まとめと考察

探究型授業では、授業内と授業外の学修の関連付けが大切であり、受講生同士の協同学修のプロセスや成果に強い影響を与える。このため、授業外学修の実態に関するアクションリサーチを通して、研究者や図書系職員との協働により、探究型授業への図書系職員の参画（1 コマ担当）、学修環境を活用した授業運営（パスファインダー開発とラーニングコモンズでの授業）を実現し、具体的な情報探索に基づく協同学修を通じた成果物（ポスター）が生成される質的改善が図られた。

この成果を基に、授業実践者である教員と学修支援者である職員が連携しながら、学修リソース（教材や空間）を活かした探究型授業モデルケースとして情報発信し、更なる定着を図っていききたい。

今回の授業改善プロセスをフロー化すると、【現状把握】⇒【見直しと検証】⇒【改善充実】という 3 ステップでの成果の顕在化を目指した。大学教育学会・課題研究プロジェクトによる恵まれた支援協力があったことから、結果的に大きな成果が得られたと考えている。普段の授業改善においては、より多くの時間を要することが考えられる。

しかし、AL 型授業を運営する上において、担当教員のみ視点に固執するのではなく、教員・職員・研究者の三者協議による相互からの改善提案や協働の実現を図っていくことは大変有意義である。教室内授業はもとより、地域でのフィールド学習や企業でのインターシッププログラムでは、当該授業に関わるステークホルダーが多角的に授業を見つめ、当該授業の在り方を一緒に考えることが益々重要になってこよう。人というソフト面だけでなく、ハード面においても、教材、教室環境の相互作用を活かした授業改善を協働しながら図っていくことが大事であろう。

今回の考察を糧に、AL 型授業「山口と世界」における一つのモデルケースとして継続実施するとともに、同僚教員への普及を続けていきたい。さらには、今回のアクションリサーチで得た知見を、他の科目にも適用できる汎用モデルの整理や図書館における専門的

な授業支援、教材補助リソース拡充に向けた継続的コミュニケーションを課題としていきたい。

## 謝辞

本稿で取り上げた授業改善に関わっていただいた三重大学 地域人材教育開発機構 長澤多代 准教授，山口大学 情報環境部学術情報課 金重幾久美 課長，日高友江 係長，松原花梨 係員はじめ，大勢の方々のご支援とご協力をいただき，多難ながらも大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

また，授業変容などの成果を明らかにすることができたのは，大学教育学会・課題研究グループリーダー 京都大学（当時）溝上慎一 先生，関西大学 森 朋子 先生ほか大勢の研究者のご支援とご協力をいただけたからにほかなりません。

改めて，皆さまに感謝申し上げます。

（大学教育センター 准教授）

## 【参考文献】

- 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会，2015，「高等教育のための情報リテラシー基準 2015 年度版」
- 三保紀裕，2016，「2015 年度前期対象授業のプレ・ポストの分析結果（2015 年度課題研究集会シンポジウム報告）」，『大学教育学会誌』第 38 巻第 1 号，78-81
- 長澤多代，2016，「アクティブラーニング型授業における教室外学修の実態：山口大学におけるフォトボイス調査をもとに（2015 年度課題研究集会シンポジウム報告）」，『大学教育学会誌』第 38 巻第 1 号，86-90
- 長澤多代，2018，「アクティブラーニング型授業における教室外学修の実態：山口大学におけるフォトボイス調査をもとに（2017 年度課題研究集会シンポジウム報告）」，『大学教育学会誌』第 40 巻第 1 号，42-46

林透, 2015, 「山口大学におけるケース・スタディー質保証のためのマネジメントに着目して」, 『大学教育学会誌』第 37 巻第 1 号, 45-50

林透, 星野晋, 2015, 「ルーブリック開発に関する実践的研究 : 初年次教育科目『山口と世界』を中心に」, 山口大学 大学教育機構『大学教育』第 12 号, 10-22

## 【注】

- 1) 山口大学では, 2013 年度より, 新しい共通教育を開始し, 全学部(共同獣医学部及び国際総合科学部を除く)の学生が同じ学習の目的に向けた 30 単位を必修科目として履修する体制になった。「新しい共通教育」の実態を検証するため, 2014 年度には「新しい共通教育に関するアンケート調査」(実施時期:平成 26 年 10 月 14 日(火)~11 月 21 日(金), 対象:全教員及び 2 年次学生(2013 年度に共通教育を履修した学生(共同獣医学部を除く)))を行い, 回答者数は教員 388 名(40.0%), 学生 1,264 名(64.3%)であった。さらに, 「新しい共通教育」の導入から 4 年が経った 2016 年度には「新しい共通教育」で学んだ学生が初めて卒業する時期を迎えるに当たり, 「新しい共通教育の検証に関するアンケート調査」(実施時期:2016 年 11 月 8 日(火)~12 月 9 日(金), 対象:全教員及び 2 年次学生(平成 2015 年度に共通教育を履修した学生(共同獣医学部を除く)))を行い, 回答者数は教員 473 名(47.9%), 学生 1,141 名(60.5%)であった。
- 2) フォトボイスとは, 長澤(2016)に拠れば, 参加者自ら撮影する写真(フォト)とその写真文(ボイス)からなる作品, そしてその作品を通して当事者の声を社会に訴え, 問題解決のためのアクションを促す参加型アクションリサーチを意味する。今回のフォトボイス調査では, 「山口と世界」受講生が Moodle を活用して, 自らの教室外学修行動を写真と文字で記録し, 当事者以外では把握することが難しい特定の授業科目のための教室外学修の実態をより明確に捉えることを目的とした。

3) 本稿において取り上げている大学教育学会・課題研究グループが開発した「授業プレ・ポスト調査」において使用する指標は, 三保(2016)により, 以下のとおりである。

### (1) 学習アプローチ尺度

学習内容に対するアプローチの仕方について測定する尺度である(16 項目, 5 件法)。「浅い学習アプローチ」と「深い学習アプローチ」の 2 側面を測定している。

### (2) 学習動機尺度

学習に対する動機づけを測定する尺度である。「積極的関与」「継続意志」の 2 側面を測定する 5 項目を使用した(4 件法)。

### (3) 授業の予習

授業に対する予習の仕方を捉える独自項目である(3 項目, 4 件法)。

### (4) 授業における他者観

アクティブラーニング型授業ではグループワーク等を通じて他者との議論などを行うが, そこで一緒に授業を受けている人達との関係性に目を向けたものである(8 項目, 4 件法)。「道具」と「仲間」の 2 側面を測定している。

### (5) アクティブラーニング尺度

授業の場における議論や発表, 他者とのやりとりを通じて生じるであろう学びのプロセスを捉えることを目的として作成した尺度である(13 項目, 4 件法)。

### (6) 知識・技能

授業を通じて, 様々な知識や能力が身についた程度について問う項目である。「専門分野や学科の知識」「プレゼンテーションの能力」など, 20 項目ある項目内容は多岐にわたっている。これについてはポスト調査時においてのみ使用した(5 件法)。

### (7) アクティブラーニング型授業に対する感想

授業に対する感想について, 自由記述と 3 つの項目(5 件法)によって問うものである。3 つの項目は, 一般的な授業と比較しての回答を求めている(5 件法)。これについてもポスト調査時においてのみ使用した。